驪山の温泉に關する文學

神田喜一郎

支那の温泉といへば、何人も直に驪山の温泉を思ひ浮ぶを常とす。實に此の温泉こそ彼の唐の玄宗皇帝と楊貴妃との美しき情話の第一齣の幕の切り落されし場所なり。白樂天の長恨歌に其の時の有樣を詠みし

春寒賜レ浴華清池。温泉水滑洗二凝脂一。侍兒扶起嬌無レ力。恰是初受二恩澤一時。

といへるは、固り人口に膾炙せる所、華清の池とは、卽ち驪山の温泉に外ならず。而して驪山の温泉は、これ以來長へに其の浮名を世に流すことゝはなりしなり。されば驪山の温泉に關する文學の大半は、殆ど詠史懷古の作に限られたるが、或は玄宗と貴妃との情話によりて、特に驪山の温泉に多くの文學的作品が殘されたりといふが適當なるやも知らず。總じて支那にては我が國の如く温泉の至る所に湧き出づることなければ、單に温泉の景物を寫し情調を詠みたる詩文は、其の數頗る乏し。

抑も驪山の温泉は支那の温泉の隨一なり。其の地は固り長安の古都に近く、自ら夙く世に顯はれしことは疑なし。何れの温泉にも其の由來に就いては祕しき說話の傳へらるゝが常なるが驪山の温泉も亦その例に漏れず。水經注太平御覽等の書に引ける辛氏三秦記といふを見るに、此の温泉を以て秦の始皇帝の時に始めて湧き出でしものとなせり。其の說に云ふ、嘗て始皇帝が此の驪山に遊びて神女に戲れしが、神女は其の非禮を怒りて唾をはきかけたるに、忽ち始皇帝の身に瘡を生じたり。始皇帝、乃ち大に怖れて、深く神女に罪を謝したるに、神女は此の温

泉を湧き出さしめて、始皇帝の瘡を洗滌したりと。こは固り一の說話たるに過ぎざれど、秦の始皇帝が其の三十五年に始めて驪山に宮殿を營みしといふ事實と合せ考ふれば、或は此の溫泉の湧き出づることは始皇帝の頃よりして世に知らるゝに至りしかとも思はる。然しそは何れにしても漢代以後の書には往々驪山の溫泉のこと散見したり。而して驪山の溫泉に關する文學の第一に現はるゝは張衡の溫泉賦なりとす。その全文次の如し。

溫泉賦并序

陽春之月。百草萋萋。余在二遠行一。顧望有レ懷。遂適二驪山一。觀二溫泉一。浴二神井一。風二中巒一。壯二厥類之獨美一。思二在化之所レ原。感二洪澤之普施一。乃爲レ賦云。

覽二中域之珍恠一。無二斯水之神靈一。控二湯谷於瀛洲一兮。濯二日月乎中營一。蔭二高山之北埏一。處二幽屏一以閒淸。於レ是殊方跋涉。駿奔來臻。士女曄其鱗。華紛雜沓其如レ烟。亂曰。天地之德莫レ若レ生兮。帝育二烝民一懿二厥成一兮。六氣淫錯有二疾癘一兮。溫泉汩焉以流レ穢兮。蠲二除苦慝一服二中正一兮。熙哉帝載保二性命一兮。

張衡は彼の兩京の賦を以て、其の才華の班固に追隨するを許されし者、其の手筆になりし此の賦が驪山の溫泉に關する最古の文學的作品として現存するは、また驪山の神女をして聞かしむるも敢て不滿は無かるべし。この賦中に「殊方跋涉、駿奔來臻。云々。」とあるは、後漢の頃よりして、既に諸方より千里を遠しとせず湯治に來る者の多かりしを證すべし。張衡の後同じく賦家として文名を馳せたる晉の左太沖は、其の有名なる魏都賦の中に、亦た驪山の溫泉を詠みて、

溫泉毖涌而自浪。華淸蕩レ邪而難レ老。

と云へるが、僅に二句のことなれば、別に取立て言ふべき程のことなし。次いで北周の庾信と王褒との二人に各々溫湯碑と題する文あり。流石に作者が作者だけに、共に駢儷の能事を盡くし、殊に庾信のものは面白けれども、其の文長くして茲に全文を錄するに堪えざるは遺憾なり

但だ其の文中に

仲春則榆莢同流。三月則桃花共下。其色變者。流爲二五雲之漿一。其味美者。結爲二三危之露一。煙青二於銅浦一。色白二於鉛溪一。非二神鼎一而長沸。異二龍池一而獨涌。

といへるが如き、其の靈筆の圓轉自在なるに驚かしむ。或は云ふ、庾信の文は是れ彼が弘農の郡守たりし時の作に係ると。

弘農は卽ち驪溫泉の所在地の古名なり。

唐代に至りて驪山の溫泉の名は大に顯る。始め唐の太宗は、此の地に溫泉宮を營みて時々此處に巡幸したるが、太宗に溫泉銘の作あり、自ら筆を揮ひて、之を碑石に刻したり。然るに其の碑石は夙に亡佚して、從來全く世に知られざりしが近年佛國のペリオ教授が敦煌の石室より其の拓本を推定せらるゝものを發見し、大に世の書法に心を寄する者を喜ばしたり。茲に寫眞にて示せるは其の一部分なりとす。若し其の文章の善、書法の美に至りては敢

唐太宗御筆溫泉宮銘

（燉煌莫高窟出土）

て怨說するまでもなし。但だ現存する所、僅に四十八行に過ぎずして、全文の知り得ざるを憾むのみ。

太宗の後、安史の亂の起るまでは、唐の歷代の天子、屢々此の驪山の溫泉宮に巡幸したるが如し。殊に玄宗は驪山の景物を愛し、天寶六載從來の溫泉宮を增築して名を華淸宮と改め、每年十月、此處に幸し、翌年の春に至りて帝都に還御するを例と爲せしといふ。されば唐初の臺閣の諸公には、多く鳳駕に扈從して驪山の溫泉に遊びし詩を傳えたるが、其の中、天子の命によりて作りし所謂應制の作も尠からず。茲に其の一二を例示すべし。

奉レ和二聖製過二溫湯一　鄭義眞

洛川方駐レ蹕。豐野暫停レ鑾。湯泉恆獨涌。溫谷豈知レ寒。漏鼓依二巖畔一。相風出二樹端一。嶺烟遙聚レ草。山月廻臨レ鞍。日用誠多幸。天文遂仰觀。

奉レ和二溫泉言レ志應制　張說

溫谷媚二新豐一。驪山橫二半空一。湯池薰二水殿一。翠木暖二烟宮一。起レ疾逾二仙藥一。無レ和合二聖功一。始知堯舜德。心與二萬人一同。

但だかゝる臺閣體の詩は、何人の手に出づるとも、其の命意、多くは千篇一律たるを免れず、張說の大手筆を以てして猶こゝに示すが如きの出來榮えなり。他は敢て列擧するの要無からん。

安史の亂、漁陽の烽火が一度歡樂の夢を破りて後、驪山の溫泉は、復た翠華の幸するなく、徒らに詩人が詠史懷古の好題材とのみなりて、從來の臺閣體の詩は固り張衡の賦、庾信の碑の如きの作品をも見ることなし。予はそれら汗牛充棟の詠史懷古の作の中、尤も王建の溫泉宮と題する七古を喜む。其の詩に云く、

十月一日天子來。靑繩御路無二塵埃一。宮前內裏湯各別。每個白玉芙蓉開。朝元門向二山上一起。城繞二靑山一龍暖レ水。夜開二金殿一看二星河一。宮女知レ更月明裏。武皇得レ仙王母去。山鷄晝鳴宮中樹。溫泉泱泱出レ宮流。宮使年年修二玉樓一。禁兵去盡無二射獵一。日西麋鹿登二城

頭。梨園弟子レ曲譜。頭白人間教二歌舞一。

この作者王建は宮詞の作に於て古今の名手と推さるゝ者、此の種の詩は彼が絶技の壇場と稱すべし。彼には又華清宮と題する絶句あり、努めて空宮凄涼の狀を寫せり。云ふ

行盡江南數十程。曉風殘月入二華清一。朝元閣上西風急。都入二長楊一作二雨聲一。

と、是れ蓋し三體詩の劈頭に載錄せられて、今日兒童の猶ほ能く諷誦する所、短篇といへども其の神理は前の溫泉宮と題する古詩と相同じ。別に華清宮の懷古の詩にて予の愛誦措かざるものに杜牧の五古あり。その詩三十韻を重ね、頗る長篇なれば茲には割愛せんも、

歌吹千秋節。樓臺八月凉。神仙高縹緲。環佩碎丁當。泉暖涵臙鏡。雲嬌惹二粉囊一。嫩嵐滋二翠葉一。清渭照二紅妝一。帖泰生靈壽。歡娛歲月長。月聞二仙曲調一。霓作二舞衣裳一。

とて、極力開元の天子が盛事を叙し、更に一轉して、

喧呼馬嵬血。零落羽林槍。傾國留無レ路。還魂怨レ有レ香。蜀峰橫慘澹。秦樹遠微茫。

とて、安史の亂の慘禍に入り、最後に及んで亂後の荒凉を述べ、

碧鴛將レ送レ日。殷葉半雕霜。迸水傾二瑤砌一。疏風罅二玉房一。塵埃羯鼓索。片段荔枝筐。鳥啄擺二寒木一。蝸延蠹二畫梁一。孤煙知二客恨一。遙起泰陵傍。

と結び、手際は、眞に一唱三嘆の妙あり。予は此の作を以て、私かに驪山の溫泉に關する詠史懷古の作の壓卷に推さんとするなり。

其の他、唐人の作、風調の佳なるものに乏しからず。茲に三四を抄出すべし。

華清宮三首　崔櫓

草遮二回磴一絕二鳴鑾一。雲樹森森碧殿寒。明月自來還自去。更無三人倚二玉欄干一

障拖二金鷄一苦二禍機一。翠華西拂二蜀雲一飛。珠簾一閉朝元閣。不レ見二人歸一見二燕歸一。

門橫二金鎖一悄無レ人。落日秋聲渭水濱。紅葉下レ山寒寂寂。濕雲如レ夢雨如レ塵。

秋日過二驪山一　孟遲

冷日微烟渭水愁。華清宮樹不勝秋。霓裳一曲千門鎖。白盡梨園弟子頭。

但だ此の詠史懷古の作も、大抵は樣に依つて胡蘆を畫くを免れず。元明清の諸家の集、此の種の作を見ること殆ど枚擧に遑あらざれど、復た特に出色のもの無きを如何んせん。却て王建に又た華清宮と題する絕句あり、云ふ

酒幔高樓一百家。宮前楊柳寺前花。內園分得溫湯水。二月中旬已進瓜。

と。齋藤拙堂は此の詩を絕句類選に收めて「天民老人嘗爲予云。嘗坐上州伊香溫泉。見瓜熟詢之。土人謂下引溫泉灌溉上。知王建詩不妄。」と云へるが、以て彼我溫泉地の風俗の相似たるあるを證すべく、普通の詠史懷古の凡作を讀むよりは興味萬倍せり。

顧ふに驪山の溫泉に關する文學、大抵上に述ぶる所に盡く。若し更に之を詞曲小說の類に求めば、或は猶ほ意外の收獲あるやを保し難きも予は僅に長生殿傳奇の外には知る所なし。卽ち長生殿傳奇に窺浴と題する一齣あり、玄宗と楊貴妃とが相擁して驪山の溫泉に入浴せし所を、侍側の宮女が竊かに隙見する場面なり。其の入神の妙筆は一讀能く人をして恍惚魂銷せしむ。蓋し驪山の溫泉に關する文學として、最も濃艶の情趣に富めるものとす。

臨潼華清宮溫泉作　六首

鈴木豹軒

既有棲鴉噪白楊。驪山秋色晚蒼茫。降車僅罷臨潼縣。先訪玉環供奉湯。
山下亭園秋柳黃。雙池南面室中央。玉甃金雁零落盡。道是唐朝貴妃湯。
碧嶂嵯峨渭水濱。千門想像翠華春。于今山下溫泉滑。不洗凝脂洗旅塵。
東向河南第一程。微風纖月入華清。牆邊敗葉蕭々響。猶似當時私語聲。